

## まえがき

立命館大学国際言語文化研究所が第二回日の10年のサイクルに入る年の第一号となるこの号は、昨年、研究所の創設10周年を記念しておこなわれた国際シンポジウムの特集として編集されている。シンポジウムのパンフレットを引いてその表題と全体の趣旨を示せば以下のとおりであった。

国際シンポジウム「二十一世紀的世界と多言語・多文化主義 — 周辺からの遠近法」

### 趣旨

十九世紀が近代「国民国家」の時代の始まりだったとすれば、二十世紀は諸国民国家がいつそう分岐し競合し、帝国と植民地の両極化がすすみ、そしてこうした対立を克服するため厳しい戦いがおこなわれた時代だったとはいえないだろうか。そしてわたしたちは予言者を気取ることなく、二十一世紀が国民国家でも帝国でもない新たな社会の時代であることを期待せずにはいられない。

国民国家を超える生きかたとは何かという問いこそ、現代の言語と文化を考える起点だとわたしたちは確信している。そして今後の世界の動きを知るためには、二十世紀までの世界の「中心」からではなく視野からこぼれ落ちてゆく周辺からの遠近法と、一元的な国民国家の原理とは対照的な多言語主義・多文化主義の視点こそが重要だと考えている。

そうした視点から、このシンポジウムはアジアに焦点を合わせ、言語・文化を総合する映像や文学などの表現をひとつの軸とし、多文化主義・多言語主義そしてクレオールあるいは文化的「雑種性」の可能性を問い直し、同時にその問いのなかで新しい歴史像と日本の過去、現在、未来への新たな視点を開くことを試みることを目的としている。

より立ち入った目的そして3日間にわたるシンポジウムの各日ごとの主題は特集の冒頭におかれた西川所長による問題提起と各日の第一ページにおかれた趣旨を参照いただきたい。

この特集はまず何よりも、シンポジウムについてのできるかぎり忠実な資料集として3日間に語られたことの記録を残し、関心のある人々に提供することを目的としている。また、その3日間にいたるまでの学生、院生の参加をえて進められた準備の過程についても、生き生きとした記憶を喚起するてがかりとしたいという思いをこめて、数回にわたって発行されたニューズレターも資料として組み込んだ。思い通りにすすまぬ講演予定者との連絡と焦りや予定が最終的に固まったときの安堵と喜びなどはむしろこのささやかな広報誌からこそ読み取られるだろう。

編集上いくつか注記しておきたいことは、海外からのゲストの報告は著作権の問題、また報告者本人の意志などから掲載できなかったものがあること、また国内からの参加者の報告英語版は準備ができなかったものあるいは報告者本人の判断で掲載を見合わせたものもあること、したがって全体として日本語テキストと英文テキストが完全に対応するかたちにはなっていないこと、である。

このささやかな交流と開かれた場での意見交換の試みが、参加の呼びかけに応答して下さった報告者のみならず、予想以上の多数の熱意のこもった聴衆の参加によって報いられたことは、組織にあたった者として大きな喜びだった。強化したひとつの覇権のもとに組織され動員された軍事力による戦争が進行し来るべき大きな戦争がすでにカウントダウンの局面に入りつつあるとも感じられるような今日の状況のなかで、この試みがかつてありえた交流と意見交換の最後の時期を標すものではなく、新たな開かれた多元的な時代の始まりを標すものと位置づけられるようになる日が来ることを祈りたい。

1999年5月31日

立命館大学国際言語文化研究所  
創設10周年記念国際シンポジウム実行委員長

渡辺公三